

女子高校生の大学選択理由（5因子）とその受験意識との関係 —— 高群と低群の比較を中心に ——

○田中美智子（飯田女子短期大学）
浅田 隆夫（筑波大学）

女子高校生 受験意識 大学選択

1. 目的

近年の情報化社会において、高校生は将来への自己実現のために進学をどのように受けとめ、方向づけているのだろうか。

本研究は、大学進学が、高校生にとって特別なもの、時代の申し子的存在ではなく、人生80年への歩みを支える自分の生活設計に必要な学習過程と考えるとき、個々の生徒が抱く大学選択の有り様は、狭義の大学選択にとどまらず、高校生活を大きくゆさぶり支え、緊張感と充実感を満たしていく調味料的価値を持つものと考え、女子高生の学習—大学受験に関する意識調査を試みた。

本研究は、大学の学部や学科選択の理由が受験意識とどのような関係がみられるか、高群と低群との比較を中心に解析を試みた。

2. 調査対象・方法

1) 対象

M学園の高校3年生 330名（文系クラス163名、理系クラス167名）にアンケートを実施した。回収率82.8%（文系84.8%、理系81.4%）。

以後、文系クラス・理系クラスを文系・理系と略する。

2) 方法

第1次集計後、第2次集計として、主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。ついで、大学選択の理由（5因子）を中心に、その因子得点および相関係数の解析をした。「大学選択の理由5因子」と「高群、低群」は、次のように設定した。

大学選択の理由5因子の設定は、アンケート質問7「あなたは、どんなことを考えて大学の学部・学科を決めますか。」の結果を大学選択の理由とし、因子数決定の基準を固有値1以上とし、次の5因子を決定した。因子1（大学生活のイメージ重視）、因子2（教育内容・制度の重視）、因子3（将来の自分の業績・ステータスの重視）、因子4（知識・教養の習得の重視）、因子5（合格可能性の重視）。

高群、低群の設定は、バリマックス法で得た因子得点の平均より高いものを高群、それより低いものを低群とした。

3. 結果および考察

1) 入試要項の入手方法（表1）

入試要項の入手方法は、文・理系ともに「書店で買う」42.1%が最も多く、因子との関係は、因子4、因子3、因子5が高かった。

高群と低群に有意の差が認められたのは、次のものであった。

「書店で買う」では、因子1の文系29.3%（ $P < 0.05$ ）、理系20.5%（ $P < 0.01$ ）、因子4の文系18.5%

(P<0,01)、因子5の文系20,3%(P<0,01)。「大学に直接請求」では、因子3の理系17,2%(P<0,01)、因子4の文系21,0%(P<0,05)であった。

いづれも、大学の学風や就職状況、資格取得の可能性、入試科目の得意・不得意が高い理由として注目され、情報の収集がなされていることを知った。

表1 女子高校生の大学・短大入試要項の入手方法

因子・群 項目・クラス	因子1		因子2		因子3		因子4		因子5		因子別 計	平均	
	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群			
書店で買う	理	*29.3	17.8	19.7	27.4	27.4	19.7	**18.5	28.6	**20.3	26.8	47.1	42.1
	文	**20.5	15.5	18.5	18.5	20.4	16.6	22.9	14.0	16.6	20.4	37.0	
大学に 直接請求	理	18.5	14.6	17.2	15.9	17.8	15.3	*21.0	12.1	19.1	14.0	33.1	36.9
	文	16.7	24.0	24.2	16.5	**17.2	23.5	24.8	15.9	21.0	19.7	40.7	
高校で もらう	理	**1.9	7.7	2.5	7.1	4.5	5.1	7.0	2.6	6.4	3.2	9.6	11.8
	文	**2.5	11.5	5.1	8.9	8.9	5.1	5.7	8.3	**12.1	1.9	14.0	
雑誌から	理	4.0	4.3	3.2	5.1	3.8	4.5	5.1	3.2	4.5	3.8	8.3	7.0
	文	2.5	3.2	4.4	1.3	4.4	1.3	2.5	3.2	3.8	1.9	5.7	
予備校で もらう	理	0.6	1.3	1.3	0.6	1.3	0.6	1.3	0.6	0.0	1.9	1.9	2.2
	文	1.2	1.2	1.3	1.3	1.8	0.6	1.3	1.3	1.8	0.6	2.4	
因子別合計	49.4	50.6	48.7	51.3	53.8	46.2	55.1	44.9	52.9	47.1		100.0	
		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0			

(注) ①調査数は、文系n=129 理系n=128, ②表の数値は%, ③ ** P<0,01 *P<0,05.

2) 志望校の決定時期

志望校を決める時期は、「高校3年1学期」40,1%が最も多く、ついで、「高校3学年2学期」30,2%、「高校2年後半」14,1%であった。

志望校決定時期の全体的意識は、因子3(53,7%)、因子4(52,5%)、因子5(52,9%)の順に高かった。理系では、因子4(P<0,05)に有意な差が認められた。理系での、因子4の志望校決定時期は、「高校3年1学期」22,1%、「高校2年後半」13,4%、「高校3年2学期」10,2%、「高校2年前半」3,2%、「高校入試以前」3,9%、「高校1年のころ」1,6%がみられ、早期から、自分の適性や将来の人生計画が考えられ、決定がこの時期に至っていることを知った。

3) 志望校決定の相談者(表2)

大学・短大の志望校決定の第1相談者は、文・理系ともに「父母」であり、志望校決定の全体的意識は、因子5、因子3、因子4が高かったが、相談者の意識における有意の差は認められなかった。しかし、第1相談者の傾向として次のことが分かった。

文系の相談者「父母」では、5因子(37,6%)に最も高い意識がみられたのに比べて、因子2(28,0%)は、最も低い意識の傾向がみられた。このことは、志望校の決定が大学の教育内容の問題に固執されることなく、最終は合格の確率が親子間での決め手となっているように思われる。

それに比べて、理系の因子1(24,6%)にみられる意識傾向は、大学のカラーや学生生活への憧れのなものへの意識は低く、因子3(35,3%)、因子5(34,4%)の大学の評判や将来への就職、学歴などへの意識傾向があることを知った。ここにも形をかえた家族の志望校決定

の姿をみる事ができた。

また、文系の相談者「友人・先輩」では、因子3がやや高い意識としてみられるが、他の全ての因子意識は同じであった。

「相談しなかった」では、文系の因子1の高群9.6%、因子3・因子5の低群9.6%に、やや高い意識がみられた。これは、相談しなかった生徒の志望校決定が、就職の有利さ、学歴という問題より、キャンパスの雰囲気や自分の性格・学風などから、楽しい学生生活に想いを膨らませている高校生の主体的な思考の現われとも受けとめられた。

表2 女子高校生の大学・短大志望校決定における第1相談者

因子・群 項目・クラス	因子1		因子2		因子3		因子4		因子5		因子別 計	平均
	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群		
父母	文系	33.6>29.6	28.0<35.0	35.2>28.0	33.6>29.6	37.6>25.6	63.2	61.1				
	理系	24.6<34.3	30.3>28.7	35.3>23.7	33.6>25.4	34.4>24.6	59.0					
友人・ 先輩	文系	4.8= 4.8	4.8= 4.8	5.6> 4.0	4.8= 4.8	4.8= 4.8	9.6	13.0				
	理系	4.9<11.5	9.8> 6.6	9.8> 6.6	9.8> 6.6	7.4< 9.0	16.4					
相談 しない	文系	9.6< 4.8	6.4< 8.0	4.8< 9.6	7.2= 7.2	4.8< 9.6	14.4	13.7				
	理系	6.6= 6.6	4.9< 8.2	3.3< 9.8	6.6= 6.6	6.6= 6.6	13.1					
先生・ その他	文系	5.6< 7.2	5.6< 7.2	8.8> 4.0	5.6< 7.2	7.2> 5.6	12.8	12.2				
	理系	6.5> 4.9	5.7= 5.7	5.7= 5.7	6.5> 4.8	7.3> 4.0	11.5					
因子別合計	50.6<51.8	47.8<52.2	54.3>45.7	53.8>46.2	55.5>45.3		100.0					

(注) ① 調査数は、文系n=125 理系n=122, ② 表の数値は%,

4) 志望状況

(1) 進路

志望進路の第1位は、4年制大学61.0%、短大39.0%がみられた。

志望進路と意識の関係については、文・理系ともに因子1・因子5が有意(P(0.01))であった。さらに理系では、因子2(P(0.01))、因子4(P(0.05))に有意差がみられた。

そして、因子3については、文・理系ともに有意差は認められなかった。

このことは、受験生の進路決定が、なによりも大学の入り口と出口の問題と大学のイメージを考慮し決定されること、そして、理系においては、大学での知識・教養につながる大学の教育内容にも高く関心がもたれていることが分かった。

(2) 大学の選択 (表3)

大学選択について大きく分けると、「推薦」が33.5%(4年制大学6.6%、短大26.9%)に対して、「一般」が66.6%(4年制大学46.8%、短大19.7%)がみられた。

大学選択への全体的意識は、因子3、因子5、因子4の順に意識が高かった。

大学選択の群差についてみると、「4年制大学、一般」において、因子1の文系・理系に有意(P(0.05))、因子4の文系・理系に有意(P(0.01))、因子5の文系・理系に有意(P(0.01))の差がみられ、その他の因子には有意差はみられなかった。

このことは、推薦指定校制の問題も考えられるが、受験生は合否とは別に、「推薦」より

「一般」による選抜を考えている者が多いことが分かった。

文系では、大学のイメージが選択の基準として高く意識されているのに対して、一方、理系では、文系より大学教育内容・制度に着目する生徒が多いこと、そして文系に比べて理系の者に大学での知識・教養の拡がりを、より期待していることが分かった。

そして、高校生が、推薦に拘ることなく、大学受験に取り組んでいることが分かった。

表3 女子高校生の大学・短大の選択に際しての意識

因子・群 項目・クラス	因子1		因子2		因子3		因子4		因子5		因子別 計	平均
	高群	低群										
4年制大学 推薦	4.2	2.1	4.2	2.1	2.1	4.2	4.2	2.1	* 5.6	0.7	6.3	6.6
	† 5.4	1.5	5.4	1.5	3.1	3.8	4.6	2.3	2.3	4.6	6.9	
4年制大学 一般	**36.0	14.7	23.1	26.6	28.7	21.0	* 21.0	28.6	**18.8	30.8	49.7	46.8
	**25.4	18.4	† 26.9	16.9	26.1	17.7	† 28.4	15.4	**13.9	30.0	43.8	
短大 推薦	** 2.8	9.1	3.5	8.4	6.3	5.6	7.7	4.2	* 9.1	2.8	11.8	13.2
	† 3.1	11.5	† 3.8	10.8	9.2	5.4	6.9	7.7	10.0	4.6	14.6	
短大 一般	11.9	7.7	9.8	9.8	11.2	8.4	9.1	10.5	8.4	11.2	19.5	18.2
	† 3.8	13.1	5.4	11.5	** 4.6	12.3	7.7	9.2	9.2	7.7	16.9	
本学(短大) 推薦	** 1.4	9.1	3.5	6.9	5.5	4.9	6.3	4.2	* 8.4	2.1	10.4	13.7
	† 3.8	13.2	8.5	8.5	10.8	6.2	6.2	10.8	**16.1	0.8	17.0	
本学(短大) 一般	1.4	0.7	0.0	2.1	1.4	0.7	0.7	1.4	1.4	0.7	2.1	1.5
	0.0	0.8	0.0	0.8	0.0	0.8	0.0	0.8	0.8	0.0	0.8	
因子別合計	49.5	50.5	46.9	53.1	54.6	45.4	51.3	48.7	52.0	48.0		100.0
	100.0		100.0		100.0		100.0		100.0			

(注) ① 調査数は、文系n=129 理系n=128, ② 表の数値は%, ③ * $P < 0.01$ * $P < 0.05$,

④ 「まだ決まらない」は、文・理系ともに0.0%.

(3) 志望学部

大学・短大への志望学部の傾向は、文系の学部(文系77.9%、理系57.8%)、家政学・生活科学(10.6%、19.6%)、芸術(9.6%、7.8%)、理系の学部(1.9%、12.7%)、体育(0.0%、2.0%)の順であった。理系には、やや理系の学部への志望者が多かった。

志望学部からみた全体的意識の傾向は、因子5、因子3、因子4、因子1の順に意識が高く、意識が低かったのは因子2であった。

志望学部の意識については、理系の因子1 ($P(0.01)$)、因子4・5 ($P(0.05)$)に有意な差がみられた。その主なる学部は、人文学部16.7%、外国語20.6%、家政学・生活科学19.6%であった。この点からは、志望学部選択が学風や学生生活、さらに合格率に重きがおかれ、大学教育内容や制度に左右されることは少ないことが分かった。

4. まとめ

女子高校生にとって、大学進学は、高校や予備校の先生を頼り、指導を得るというより、自分に必要とする大学選択への積極的な対応が高校3年1学期までになされていた。

大学選択は、自由な大学生活の楽しさや校風の重視がみられ、文系に比べて理系には、大学への知識・教養、そして、合格の可能性を高く意識している者が多いことが分かった。